

全校授業を支える「潜在的カリキュラム」

2月5日（月）音楽科全校授業。昔のように「反省会」はなくなったのですが、今日を迎えるまでの音楽部、そして授業者であった末永先生の頑張りを思うとやっぱり少し頂きたくなるものです。昔、「酒はだれと飲むかで味が違う」などと飲兵衛の先輩に語られたことがあり辟易した経験がありましたが、今となっては成程的を射た得た表現だと妙に納得してしまいます。

本来は皆さんに言葉で伝えればよいのですが、みなさん忙しいので自分なりに振り返ってみました。以下、失礼な部分はいつものこととご容赦願います。

私なりに昨日の「全校授業研究会」を以下に総括してみます。

検討会で阿部先生が「トムとジェリー」の提示について、「私は効果的だったと思います」と渡部先生の意見と異なる意見を話したところが昨日の検討会の「山場」だったように思います。いわゆる音楽部で提案している「視点2」の手立ての有効性について子どもも姿で検証できるチャンスでした。

ここで活用して欲しかったのが「抽出児記録」です。ABCと3人の抽出児を決めて記録をとっているのですが、記録の先生方に紙面だけでは伝えられないニュアンスも含めて報告することが求められました。そして、その報告をもとに、司会の先生が、この手立ての有効性について参観した先生方の意見を広く求めていくと、音楽部の提案した手立ての検証に有効な話合いになった、と思います。

そういう意味では、抽出児記録はものすごく重要です。

そのまま研究紀要につながっていくことを想定すると、記録する観点をしっかり持ってないと、紀要に生かせる記録になりません。

私は抽出児記録は研究部員が責任をもって行うべきだと思っています。それは教科部との事前の話合いを通して、教科部の考え方を理解し、どんな姿を目指して授業を作っているかを理解しているからです。そして、何より研究主任、副主任が率先して記録者になるべきだと思います。そうすることで後に続く記録の先生に「記録としての手本」を示せる意味があるからです。

何か意図があって記録者を割り振っているのか分かりませんが、全校授業を研究部がプロデュースしている側であることもう一度確認してください。

話は長くなります。

検討会の時間配分も再考の余地があります。

頭書きで40分。授業で40分。その後指導助言を40分と設定しています。昔ながらのやり方で進めているのですが、「頭書き」の話合いはやはり「空中戦」の連続で、どこまで時間をかけても限界が見えません。本来行うのは、子どもの姿と授業の手立ての検証をできれば「科学的に」みんなで行うことです。授業はともかく頭書きについて研究部員が意見を言うのはだめではありません。でも全校授業の提案は教科部の提案であり、研究部の提案であることも踏まえた上で発言する姿勢が求められることもお忘れなく。だからこそ事前の教科部と研究部の話合いは大切にしたいと思っています。

次回の検討会は今までの慣習にとらわれない大胆な変革を期待します。

指導助言の小野寺先生からの一言は重かったですね。

言い換えれば「学習指導要領をきちんと読みなさい」ということです。もちろんそれぞれの教科部では今回の改訂も踏まえて読んでいることと思いますが、求められたのは私たち参観者の方です。研究部から事前に授業の告知があって、指導案は読んでくるようにという案内はあるのですが、学習指導要領はその前提として理解しておかなければならないことは当然です。

(※この点は私も読んでなかったので大いに反省しています。次回からは少なくとも指導書は持参して検討会に参加するように心掛けます。)

こうして考えていくと、これから図工、国語、算数、道徳と4週連続で全校授業を設定していることにやはり無理があったのではないかと不安に思えてきます。前にも書きましたが、全校授業は授業や教科部も大変ですが、参加者がいかに勉強してくるかで話合いの価値が決まるからです。

(※勇気ある撤退も・・・)

昨日、小塩先生が音楽部の今回の提案を「意欲的な提案」だった、と最高の褒め言葉で紹介してくださいました。音楽部の3人の今回の全校授業までの積み上げは、これまでの2つの部内授業からも十分に伝わってきました。

それだけに、本来こういう全校授業研究会を支えている「潜在的カリキュラム」は私たち附属小の先輩が後輩に責任をもって伝えていかなければならないことでもあると思います。

話は研究に戻ります。

今回の研究の分岐点は1年次から2年次に移る時にあったように思います。それは主題が変わっているからです。

主体的に学ぶ



問いを持ち追究し続ける



3つの要件



各教科の研究主題



授業を構成する3つの視点



各授業での視点からの手立て

その時から

左図のように階層的になっているのですが、各教科部が苦しいのは、例えば音楽部の頭書きでも「〇〇と押さえた」「〇〇とは」という言葉や用語の解説が非常に多いことにも現れているように思います。

授業づくりでの手立てが明確な「音楽部」であってもです。

ここは研究部の頑張りどころ。教科部の目指す授業づくりがもっと前面にできるように何とかスッキリとリニューアルして欲しいところです。

附属小の附属小たる所以（ゆえん）は全校授業研究会にあります。

吉川校長先生が昨日の3年2組の子どもたちの様子を絶賛していました。それは何より末永先生が「音楽で子どもを育ててきたこと」が背景にあると思います。

音楽部の先生方、本当にお疲れ様でした。

(文責：副校長 手代木)